

テーマ：学校と地域をつなぐ人材の配置の在り方に関して

1. 新居浜市が目指している学校と地域（公民館等）の連携・協働について

活動の基本スタンスは、「持ち寄り」の「寄り合い」を重ねること

第一段階 社会教育（公民館行事）への参加 連携協力 三世代交流活動など

第二段階 学校現場に地域住民が関わる 恩返し・先生の大変さ・子どもを認める

きっかけは、「学校支援を通じた地域の連帯感形成のための特別調査研究」H19
活動の三本柱…場を整える活動、学習を支える活動、安全安心を支える活動

★この取り組みが学校支援地域本部に発展 ～逆境からのスタート～

荒れた学校を如何にして立て直すか…学校と地域が卒啄同機で連動した。

公民館は「地域主導型公民館」へ原点回帰 住民が主体的に地域課題を解決する

“個人の要望”の充足だけではなく、“社会の要請”に応える公民館に

➡子ども達の育ちを支え、学びの場である学校をサポートするのは地域である。

ただし、地域によってその熱意には温度差がある。

・学校の内にある課題を、地域が関わることで少しでも解決できれば何より

第三段階 地方創生やまちづくりの観点から学校と関わる地域の風土醸成を目指す。

新しい時代にあったまちづくり やってもらって当たり前➡自分達でやろう

人口減少抑制策は、子ども達が学校に行っている時期に郷土愛の種を蒔くこと

学校は地域的一部分、子どももまちづくりの担い手、小規模多機能自治組織

2. 学校と地域をつなぐ地域コーディネーターに期待すること。

(1) 「社会教育人」と「学校教育人」それぞれの違いを自覚することが大事

「社会教育人」はこれまでの地域活動の実績によって評価する。社会関係資本

「学校教育人」は学校における教育に対する理解度によって評価する。

公民館で信頼されている人が、学校で受け入れられないこともある。熱すぎる情熱

➡学校で先生の要望を収集整理 + 地域活動の人間関係を活用

両者の機能を有する人材は極めて少ない、公民館と学校それぞれにハブ機能を

知識優先では対立することも、人に信頼されない人はダメ “和光同塵”の

人猪突猛進型は敬遠される。話し上手より聞き上手、責任感が強いお人好し

(2) 学校支援のことだけを考えるのではなく、地域全体の未来を考える人材が必要。

良い学校になれば、良い子ども達が育つ、その子ども達が地域の未来を創る。

学校支援地域本部というより、地域づくり本部の学校支援部会という感覚か

(3) 学校へのコーディネーター単独配置より、チーム体制が理想ではないか。

学校図書支援員の活動 2名チームで数校を担当、活動拠点は教育委員会事務局

単独配置のリスク 個人の資質・能力に依存、異動の困難さ、マンネリ化、甘え

チーム対応で切磋琢磨、協力する人材の枠が拡大し、市全体の教育力が高まる。

- (4) 学校の中に、地域と教師、子どもも集える共有スペースを確保できないか。
職員室に地域住民は入りにくい。校長室でも同じ 空き教室の有効活用は可能か
新居浜市の2つの学校にある共有スペース 現在はあまり利用できていない。
 ▶コーディネーターが常駐する学校支援地域本部のベースキャンプ
- (5) 学校と地域が生息の情報を摺り合わせる場としての「学校地域連絡会」の意義
月1回の学校側と地域住民間の学校に関する現状報告会 8年間の経験の蓄積
個人情報に配慮し、学校情報については都合の悪い情報も語られる 寄り合いの場
直接、教師から支援して欲しいことが語られ、できることは共にやる姿勢になる
教師は交替で参加、最低年に一度は地域の人と語り合う場を体験する。
顔見知りになって日常の関係性も向上し、あいさつや地域活動も円滑になる。

3. 地域コーディネーターの養成、研修について

- 新居浜市での養成・研修 … 理念的なものがほとんど、実務面は弱い。
公民館長は個人差が大きい。 経験年数、出身経歴、地域・学校との関係性
公民館主事は原則、社会教育主事講習修了者を配置 それでも個人差が…
それ以外のコーディネーター 地域内の情報源情報を知る人材 自主的な研修
- ◎ 愛媛県コーディネーター養成研修 委託事業時点は必須▶補助事業の現在は任意
学校教育領域は教師の不可侵領域であり、地域にできることは人的ネットワーク
の有効活用だと考えているのか。
学校内に配置するコーディネーターは、教師との直接的な関係が必要となり、教育面での専門性も一定レベル必要なので、スキル習得のための研修が必要では。

4. 地域連携やまちづくりにおける教育委員会と首長部局との連携について

首長部局は配分予算を如何に執行するかが目的になっている。単年度で事業成果を求められるため、年度内に事務執行するために、担当課だけで対応の方が手間がかからず、効率的と考え、他に協力を求めようとしない傾向が強い。

長期的、戦略的な観点の事業推進には、当事者意識を持った人づくりこそが不可欠であり、行政の思い込み事業は住民に定着しない。

★地域のファシリテーター的人材への期待大 ▶ 話し合いの場づくり

例 ①別子山との合併事業 話し合いの不足▶行政が勝手にやった▶責任は行政だ
別子山サバイバルワークショップ 公民館を拠点に“寄り合い”を開催

②防災意識の普及啓発 学校との連携 … 訓練・備蓄・避難所

公民館と地域コミュニティ団体との連携 地域防災▶地区防災

③健康寿命の延伸 超高齢社会を如何にして克服するか？ 我が身をケアする。

先導事例がモデルになり、活動が伝播し、市の福祉施策に反映される。

今後公民館が地域福祉の拠点になる（生活支援コーディネーター配置）

★ いずれの場合も子どもが関わることで地域活動は活性化する。

5. 学校と地域の連携協働による教育活動を通じた地域振興・再生の在り方

子ども達が地域の中で自分達の意見を語り、地域構成員として活躍できる場を提供することは大人の務めであり、子ども達と大人が相互乗り入れ状態で、まちを創造していくことが重要ではないか。

(1) 子ども達の意見が地域の話し合いの場で反映され、大人の行動を変容させた。

国道バイパスの道路のアダプトプログラムの具体的な企画立案のワークショップに中学校の生徒会メンバーが参加し、自分達に何ができるかを意思表示し、大人が本気になった。中学校がアダプトプログラムの担い手として花壇管理、現在は生徒会が働きかけ、「大好き泉川の日」のボランティア活動に自主参加するようになる。

学校のE S D教育のテーマに「自分達の道路を育てる活動」を掲げ、地域と一緒にボランティアの意義や環境保全活動に取り組んでおり、地域住民にとっては中学生らの活動が地域活性化の呼び水となっている。

(2) 新居浜南高校ユネスコ部が別子銅山の近代化産業遺産を全世界に情報発信

前身の情報科学部の活動から、既に19年の歴史を刻んできた。当初は、情報をインターネットで発信することから始めたが、先人の営み、文化、さらには生き方そのもの自主学习、ヒアリング、先進地研修などで磨きをかけ、現在は新居浜市にとって欠くべからざる地域づくりの担い手となっている。

その活動領域は観光業者とタイアップした近代化産業遺産観光ツアーの企画運営、生涯学習大学の講師、中学生のふるさと教育の一環として行われる別子銅山ツアーのガイド役など多岐にわたる。また、ユネスコ協会、行政各般とのネットワークが構築され、総合的に活動を支援する体制が生まれた。まさに、新居浜南高校を市全体で支え、彼らも市の活動を担う関係性が生まれている。ちなみに、顧問のYK教諭は既に20年同校に勤務しているが、毎年、人事異動の時期には様々な地域の声が寄せられ、勤務継続要望が県教委に伝えられていると聞く。制度として学校運営協議会こそないが、実質上同じ機能を既に持っていると言える。人事に止まらず、高校と市全体の日常的な関係性が構築され、まさに地域協働学校としてマネジメントされている。

新居浜南高校の活動が他校にも波及効果を齎し、地域資源を活用した新商品開発や市民を対象にした高校生主催のイベントが生まれた。高校生、中学生が主人公となり、活躍できるまちが子ども達の意識変容を生み、地方創生を果たすはず。

★ 成果はすぐには現れない。すぐ現れるものは長続きしない。まず、十年の計が大事